

戦後も戦場に立ちつづけた大岡昇平

瓦版16号で大岡昇平の「日の丸」に対する考えかたを取り上げたが、大岡が《外国の軍隊が日本の領土上にあるかぎり、絶対に日の丸をあげないということである。／捕虜になってしまったくらいで弱い兵隊だったが、これでもこの旗の下で、戦った人間である。われわれを負かした兵隊が、そこらにちらちらしている間は、日の丸は上げない。これが元兵隊の心意気というものである。》と断言するとき、彼が本当に言いたいことは、《日の丸は上げない》ということだったのか。自分の態度をきっぱりと表明することにあつたのか。

「おもちゃの日の丸」という痛烈な言葉を目にして、頷くだけでは済まされないものが感じられないだろうか。騒がしいだけでなんの実りもない思考停止状態の「日の丸・君が代」論争に、大岡が見事に切り込んでくれたことに溜飲を下げ、もし「日の丸・君が代」について訊かれることがあれば、大岡説を披瀝してみせる、といった芸事として受け取って終らせるわけにはいかないものが、そこにはある。タレントが受け狙いで連発する、「その話、頂き」といった調子で軽く流していいはずがない。

35歳の年齢で召集されてフィリピンに送られ、敗戦の年の一月に露营地を米軍に襲われて俘虜になった大岡の『俘虜記』には、次の記述がみられる。一つは、日本に到着する三日前の復員船の船上で病気の復員兵が二人死んだことについて、《祖国を三日の先に見ながら死んだ人達は確かに気の毒であった。しかし、彼等が気の毒なのは戦闘によって死んだ人達が気の毒なのと正確に同じである。私とても死んだかも知れなかった。自分と同じ原因によって死ぬ人間に同情しないという非情を、私は前線から持って帰っている。》というものである。彼はここで、帰還する自分を帰還途中に死んだ復員兵と同等にみなしている。つまり、自分が死んで、他の者が帰還していたかもしれなかった。そこにはなんの必然性もなかった。だから、「生き残った」という負い目もなかった。

もう一つは、フィリピンに送られる途中、《私はすでに日本の勝利を信じていなかった。私は祖国をこんな絶望的な戦いに引きずりこんだ軍部を憎んでいたが、私がこれまで彼等を阻止すべく何事も賭さなかった以上、今更彼等によって与えられた運命に抗議する権利はないと思われた。一介の無力な市民と、一国の暴力を行使する組織とを対等に置くこうした考え方に私は滑稽を感じたが、今無意味な死に駆り出されていく自己の愚劣を嗤わないためにも、そう考える必要があつたのである。》という個所である。自分に無意味な死を強いる軍部が愚劣なら、それに抵抗しない自分も愚劣であり、その愚劣の中で自分の自由意思を剥奪されたまま、戦場に赴いていたのである。

大岡は『野火』の中で、《戦争を知らない人間は、半分は子供である》と書いた十数行後に、復員してから精神病院に入れられた主人公にこう語らせる。

《不本意ながらこの世へ帰って来て以来、私の生活はすべて任意のものとなった。戦争へ行くまで、私の生活は個人的必要によって、少なくとも私にとっては必然であつた。それが一度戦場で権力の恣意に曝されて以来、すべてが偶然となった。生還も偶然であつた。その結果たる現在の私の生活もみな偶然である。今私の目の前にある木製の椅子を、私は全然見ることが出来なかったかも知れないのである。》

しかし人間は偶然を容認することは出来ないらしい。偶然の系列、つまり永遠に堪えるほど我々の精神は強くない。出生の偶然と死の偶然の間にはさまれた我々の生活の間に、我々は意志と自称するものによって生起した少数の事件を数え、その結果我々の裡に生じた一貫したものを、性格とかわが生涯とか呼んで自ら慰めている。ほかに考えようがないからだ。》

そして、《しかし多分これもたわ言であろう》と自覚しながら、《もし私の現在の偶然を必然と変える術ありとすれば、それはあの権力のために偶然を強制された生活と、現在の生活とを繋げることであろう。だから私はこの手記を書いているのである。》

戦争は個々人の生活から必然を奪い、すべてを偶然にしてしまった。自分の意思や努力も全く関係

がなく、死んだ者も生き残った者も、偶然の賜物^{たまもの}であった。死ぬと生きるの紙一枚の違いは、偶然の気紛れがもたらしたものであった。人の生死が偶然に委ねられているなかでの、殺すか殺されるか、であった。兵隊蟻の戦争とはそのようなものであった。大岡は偶然生きのびて敗戦後の日本に帰還することになり、自分の意思で戦後社会を生きざるをえなくなった。彼が戦場での自分を否定せずに戦後を生きようとするなら、《権力のために偶然を強制された生活と、現在の生活とを繋げること》に全力を挙げなければならなかった。

戦場での自分を抜きに戦後の自分がありえないことを考えるなら、戦場の自分が戦後の生活を生き抜くほかにありえなかった。瓦版16号で、〈大岡は戦場から戦後日本に帰還したのではなく、戦場に立ちつくしたまま帰還したかのようにみえ、彼の「戦場の目」には敗戦で「よごれたしょぼたれた日の丸」しか映らなかったし、特攻兵士たちは驚異的な「強い意志」で輝く希望にほかならなかった。〉と書いたが、確かに彼は戦場に立ったまま戦後を生きるなかで、「おもちゃの日の丸」を目にし、おもちゃの戦後を相手にしていたのだ。

大岡が「おもちゃの日の丸」と見ている、その底に彼が戦場に立っているのを凝視することが肝心であろう。膨大な復員兵の中で大岡だけに「おもちゃの日の丸」と映っていたのは、唯一彼が戦場に立ったまま戦後を過ごしていたからだ。どんなに否定されるべき戦場であろうとも、汚れた日の丸の下で生死を賭けた戦いを繰り広げてきたことは紛れもなかったし、戦後の日の丸にはだれも命を賭けていないのは透けていた。だれも命を賭けていない戦後であった。戦後は敗戦の廃墟の中から始まったが、大岡にとっては戦後が始まるなら、それは戦場からでなければならなかった。戦後はゼロから始まるのではなく、マイナスから始まらなければならなかった。

ゼロとマイナスの差から見れば、戦後の日の丸は「おもちゃの日の丸」にほかならなかったし、マイナスを切り捨てる戦後はおもちゃの戦後そのものであった。戦場に立つ大岡には一ミリの揺らぎもなかった。それは芸術院会員の辞退にもあらわれていた。大岡の振る舞いははっきりと戦場から押しだされていたし、彼の言葉も戦場から発されていた。大岡の言葉がだれの言葉とも決定的に異なっているのは、彼の言葉には足が生えており、その言葉の足は戦場にすくくと立っていたからだ。彼の「おもちゃの日の丸」発言に感嘆するだけで、その言葉が彼が立っている戦場から発されていることを見なければ、その発言には出会えていないのである。

言葉は頭の中で煮詰められて口から発されるものではないという問題を、大岡昇平の戦場は突きつけていた。言葉は自分が立っている場所から否応なく押しだされてくるものではないか。頭で考えられて口から出てくる言葉が浮遊を免れないのは、言葉をつなぎ止める杭を持たず、杭を打つべき場所を持たないからだ。言葉は言葉を次々と呼び込んで増殖していく作用を持つが、言葉だけの空虚なやりとり終始しないためには、言葉は言葉を育て、言葉を発する者を言葉とともに運んでくれる場所を持たなくてはならない。

いい言葉、気の利いた言葉、賢く感じられる言葉、思想をあらわすための言葉……が問われる以前に、なによりも言葉には根が生えており、その場所があることを鮮明に感じさせていることが、はるかに重要ではないか。大岡の「おもちゃの日の丸」発言は、その言葉以上に、その言葉が大岡のどこからやってくるのか、という不思議さを際立たせていたはずだ。《戦争を知らない人間は、半分は子供である》という『野火』の中の言葉は、「場所を持たない言葉は、半分は生きていない」と言い換えることができるかもしれない。

いうまでもなく大岡にとっての戦場は権力によって強制された場所であって、彼が望んで作りだした場所ではない。それでも自分が戦死したかもしれない戦場に立って言葉を発し、行動を決定しようとしてきた。彼のような戦場を持たない者に問われていることは、自分がそこで戦死するかもしれない戦場をどのように見つけ、作り出すことができるか、であろう。言葉はその課題を負っているし、負わなくてはならないのだ。言葉が発されてくる場所を持つために、言葉（を発する者）はその場所をつくり出す戦いに赴かなくてはならない。大岡の「おもちゃの日の丸」発言は、言葉の増殖作用からは生み出されてこない、全く別の言葉であることを浮かび上がらせていたのである。